

制御焦点と認知的感情制御が後悔及び適応的機能に及ぼす影響

伊藤 拓

我々は誰しも生きる上で判断や選択を間違えることがあり、そのような失敗はときとして人に後悔 (Regret) を経験する。後悔は、もし異なる選択をしていたら、よりよい結果が得られていただろうと考えることから生じる (Zeelenberg & Pieters, 2007)。後悔にはネガティブな側面ばかりでなく、適応的な機能が存在することが示唆されている (e.g. Goto & Kusumi, 2015)。一方、先行研究では後悔に対処する方法について検討されてきている (上市・通谷, 2002) が、先に述べたような後悔の適応的機能と後悔の対処の方法について併せて論じている先行研究はほとんど見られない。また、これまで、後悔への対処について論じてきた先行研究では、ほとんどの場合、後悔を低減することを指して対処としてきたが、後悔を増大する対処方略にも言及する必要がある。

本研究では、後悔の対処方略として認知的感情制御に着目する。Garnetski, Kraaij, & Spinhoven (2001) は種々のコーピングや防衛機制を整理することで、9つの認知的感情制御方略を見出し、その中にはネガティブ感情を増大させる適応的な方略と不適応的な方略があると指摘している。また、人がストレスに対して用いる対処方略の使用傾向及びその効果はそれを用いる人のパーソナリティ特性によって異なる (高木, 2017)。よって本研究で用いる認知的感情制御についても同様のことが言えるだろう。本研究では、そのようなパーソナリティ特性として、制御焦点に着目する。

以上を踏まえ、本研究では、認知的感情制御が後悔を介して後悔の適応的機能に及ぼすというモデルを構成することを第一の目的とし、更に、個人の制御焦点による、そのモデルの差異について検討することを第二の目的とする。

方法

調査協力者及び調査方法

調査はオンライン調査システム (Qualtrics) によって作成したオンライン上の質問紙調査で行った。最終的に537名が調査に回答した (男性276名, 女性200名, その他1名, 未回答60名, 平均年齢20.18歳)。

調査内容

制御焦点 制御焦点を測定する尺度には尾崎・唐沢 (2011) が Lockwood, Jordan, & Kunda (2002) の Promotion/prevention focus scale を邦訳して作成した促進予防

焦点尺度邦訳版 (以後、促進予防焦点尺度) を用いた。全16項目について7件法で回答を求めた。

シナリオ 本研究では、大学選択をシナリオとして提示した。生じた後悔を低減するために人がとる方略は、その意思決定が行動を選択したものだだった場合と、非行動を選択したものだだった場合とで異なるという上市・楠見 (2002) に基づき、元々意図していた大学と異なる大学を選択する (行動) シナリオと元々意図していた大学を選択する (非行動) シナリオの2つのシナリオを全ての回答者に提示した。

認知的感情制御 榎原 (2015) が Garenfski et al. (2001) の Cognitive Emotion Regulation Questionnaire を邦訳した日本語版 CERQ (以後、CERQ) を用いた。9つの認知的感情制御方略について、4項目ずつの全36項目を用い、各シナリオ提示後、それぞれの方略について回答者自身ならどの程度用いるかについて7件法で回答を求めた。

後悔 楠見他 (2008) を参考に、3項目を用い、後悔尺度とした。各シナリオで認知的感情制御方略を尋ねた後に7件法で尋ねた。

後悔の適応的機能 Saffrey et al. (2008) の結果から、人が後悔に付随していると認知していることが示された5つの適応的機能のうち、4種類の機能について各2項目の計8項目について7件法で回答を求めた。

倫理的配慮

本調査は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理委員会の承認を受けた (ID: 18-1174)。

結果と考察

得られた回答から欠損値及び不備のあるものを除き、430名 (男性239名, 女性190名, その他1名, 平均年齢20.22歳, $SD=2.298$) を分析の対象とした。

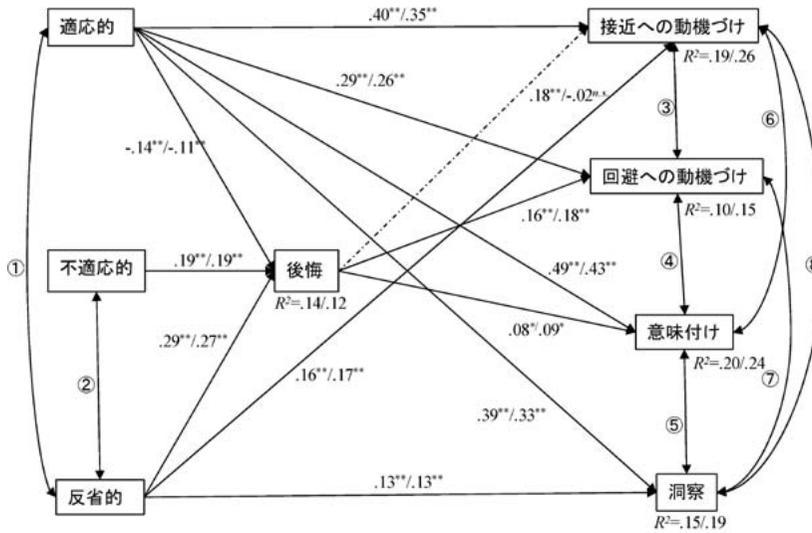
制御焦点による回答者の群分け

Lockwood et al. (2002) にならい、回答者の制御焦点による群分けを行った。両群の差の平均に差があることを確認するために対応のある t 検定を行ったところ、有意な差と十分な効果量が認められた ($t(428)=24.35, p<.01, d=2.34$)。

CERQの二次因子分析

複数の認知的感情制御方略が後悔に及ぼす影響を包括的に反映した変数を得るために、CERQの9つの下位尺

制御焦点と認知的感情制御が後悔及び適応的機能に及ぼす影響



図中の相関係数は以下の通り

- ① $r=.26^{**}/.33^{**}$ ② $r=.17^{**}/.17^{**}$ ③ $r=.62^{**}/.66^{**}$ ④ $r=.40^{**}/.44^{**}$
 ⑤ $r=.48^{**}/.51^{**}$ ⑥ $r=.50^{**}/.55^{**}$ ⑦ $r=.38^{**}/.47^{**}$ ⑧ $r=.53^{**}/.55^{**}$

注1. 図中の数値は標準化係数を示し、左から予防焦点/促進焦点とした。

注2. 有意でないパス、誤差、相関は省略した。

注3. 実線は等値制約を課したパス、破線は等値制約を課していないパスを示す。

** $p<.01$, * $p<.05$

$\chi^2(33)=30.620^{**}$, GFI=.986, AGFI=.962 CFI=1.00, RMSEA=.000

Figure 1. 行動シナリオにおける因果モデル

度得点について二次因子分析（反復主因子法・プロマックス回転）を行った。スクリープロットと解釈可能性から3因子解を採用した。第1因子を「適応的方略」、第2因子を「不適応的方略」、第3因子を「反省的方略」とした。この結果からは、Garnefski et al. (2001) が不適応的と主張する方略が、更に2つに大別されるということが示唆された。

因果モデルの検討

制御焦点による認知的感情制御、後悔そして後悔の適応的機能の因果関係を検討するため、共分散構造分析を用いてモデルを構成した。

採択されたモデルからは、後悔への対処方略から後悔

を介して、その適応的機能に至るまでの一連のプロセスが存在し、それらが個人のパーソナリティによって異なることが明らかとなった。何かを選択し、ネガティブな結果に直面した場合に自身に最適な方法で出来事を認知していくことが、後悔を調節し、適応に活かしていくうえで肝要であろう。

引用文献

Garnefski, N., Kraaij, V., & Spinhoven, P. (2001). Negative life events, cognitive emotion regulation and emotional problems. *Personality and Individual Differences*, 30, 1311-1327.